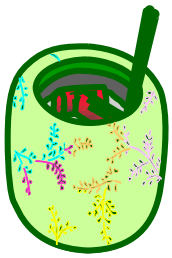
秋竹小　学校だより

第３６号　平成24年12月7日

いざ子ども 走りありかん 玉霰

年賀状が書けない！？



　今年も年賀状の季節となりました。手紙離れが進みつつあるといわれるようになって久しいのですが、最近は、年賀状からメールへの転換を図っている若者も多く、年１回の年賀状のやり取りもかなり減ってきているようです。

　そんな中で、ハガキが正しく書けない子どもが増えてきているという記事を目にしました。平成 21 年に行われた全国学力調査の６年生国語で『自分の名前・住所、相手の名前・住所の４つを正しく配置しなさい』という問題の正答率が６７．１％だったということです。この数字は、４０万人の小学生が、ハガキを正しくかけないということを意味しています。

　学習指導要領の改定で「言語活動の重視」が掲げられたことに伴い、書写の教科書には友人や祖父母に対する手紙を題材として、書き方の学習が取り入れられています。秋竹小では、５・６年生が夏休み前に暑中見舞いを書く学習を行いました。実際にハガキを出したわけではありませんが、相手の住所･氏名、自分の住所･氏名を練習用紙に書き込み、メッセージも各自が考えて書きました。何を書こうか悩みながら、それでも楽しそうに学習に取り組みました。ぜひ、この学習を年賀状を書くときに生かしてほしいと思います。

「なかま活動」で培われているもの

　これまでも、なかま活動をしているときの子どもたちの様子をお伝えしてきましたが、今日は、カーニバルに向けての練習風景の中から見つけた子どもたちの姿を紹介したいと思います。

　しっぽとりの練習をしているチームの様子を見ていたときのこと。「あっち、あっち。〇〇君は、あの子を（ねらって）」「〇〇ちゃん、にげて！」すでにしっぽをとられてしまった６年生が、自分のチームのなかまに声をかけています。リーダーシップを発揮し、一丸となって戦うぞ！という気迫が感じられる場面でした。

　ものとりの練習では、ルールの確認もきちんと行われています。中央ライン上に置かれた体育棒やひも、タイヤなどを、両サイドにかまえたなかまたちが、いかに速く走っていって取ってくるかという競技ですが、一度にとっていいのは２つまで、というルールがあります。自分の陣地に置いてからでないと、次のものは取りにいけません。何度目かの練習の時、

「あっ、２つまでだった！」という声。３つ目を手にしようとして、ルールに気付き、すぐに手を引っ込めて自分の陣地に駆け戻っていった６年生の姿が。ここでは、フェアプレーの精神が発揮されています。

　教室での学習では学ぶことが難しい『心』について、子どもたちの多くは、なかま活動を通して体験的に学習し、身につけているのだということを改めて感じさせられたひとコマです。